常南新聞

劇　コント　歌　ダンス　雅楽　太鼓　楽器演奏　自作ゲーム　カルタ　クイズ
特技　1/2 成人式･･･など、ときなんっ子が力いっぱい取り組みました

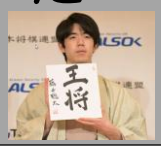
発　行　所
常磐南小学校
電話 46－2005
ＦＡＸ 46－2048
― 第 21 号 ―
2022.2.28

負けました

2022. 2. 28

祝　「五冠」達成！

校長　都筑　祐一



19歳の勢いが止まらない。ついに、藤井聡太五冠が誕生した。史上最年少、14歳２か月でプロ棋士に転じて、わずか５年。去る２月12日、渡辺明王将を破り、史上最年少で「五冠」を達成した。

将棋について、私は知識をもたないが、次々と記録を塗り替えていく若者の活躍に心が躍る。

藤井棋士と言えば、中学生のとき、担任の先生にこんな言葉を投げかけている。

『授業をきちんと聞いているのに、なぜ宿題が必要なのでしょうか？宿題は must…？』

一見、先生泣かせ、親泣かせに聞こえるこの言葉。実は、彼が中学生にして立派に自律している証なのだろう。大好きな将棋に打ち込む時間がもっとほしい。わかり切った宿題をやる意味がどこにあるのか。きっと、そう感じていたのだろう。

そして高校に進学した彼は、将棋の大会に集中するため、卒業２か月前に自主退学を申し出た。

自分の好きな道に進み、トコトン研究しながらその道を拓いていく。簡単なことではないが、その姿に真の「生きる力」を実感する。

ところで、プロ棋士の世界とはどういう世界か。その一端ではあるが、おもしろいと思うことがある。それは、劣勢に立った本人が「負けました」と宣言して終局するルールだ。

加藤一二三９段も、羽生善治９段も、当時14歳の藤井４段に「負けました」と頭を下げた。なんと痛快か。しかし、やられた方はたまらない。田中虎彦９段のコメントがある。

「世の中であれほど悔しいものはない」

プロ棋士の世界には、言い訳も弁解もしない負けの美学がある。まさに凜とした戦いにふさわしい終止符の打ち方だ。

ともすると私たちは、自分の負けを認めざるを得なかったり、悪いのは自分とわかっていたりしても、何かしら言い訳をしたくなるものだ。そしてそれが、新たなトラブルを引き起こすことも少なくない。

「負けました」「参りました」「ごめんね」「悪かったね」。負けの美学を貫くカッコいい言葉がある。

私は決して勝負師ではないが、負けの美学は大切にしていきたいと思う。世の中は、負けから学ぶことの方が、うんと多いのだから。